

2017年3月27日

## 石門心学

1. 石門心学とは：江戸時代中期、石田梅岩（貞享二年(1685)～延享元年(1744)）とその門流の学問を称して、石門心学という。心学の語源は、中国において、字義としては、「心を修める学」として唐代に既に韓愈にその用例を見出すが、一般には宋学発展の間においてその意義を確立したといえる。

創始者・石田梅岩は、名は興長。通称は勘平。丹波国桑田郡東懸村（現在の京都府亀岡市）の農民の子に生まれる。11歳の頃京都の商家に奉公し、一時帰省したが23歳時に再び京都の商家に約20年奉公しつつ、独学で学問に励んだ。心学は通常、梅岩45歳の時、享保一四年（1729）京都車屋町御池上ルの自宅に講席を設け、一般公衆のために公開の講義を始めた年をもって成立したとされている。石門心学を広める活動は熱心に開始され、当時隆盛の途上にあつた商業活動の社会的意義を積極的に肯定、卑しまれた町人も人間である事を強調、人間の本性を直接に耳と眼をもって捉え、その尊厳性を究明する事により、人の道を見出し、その学問は、町人の哲学といわれ、あくまで庶民の哲学であつた点に石門心学の本領があつたといえよう。それは、町人のために、町人の手によって、町人の体験から、町人の道を説いた実践哲学であつた。これを説くのに神道・儒教・仏教が用いられ、このことは三教一致説といわれる。その商業観・人間観においては、自由と清新さが示され、石田梅岩は大坂・河内・和泉等にも出講し、門弟は400名余、主要な直弟子に手寫堵庵、斎藤全門等、門弟の影響下及び直弟子の門弟に中沢道二、柴田鳩翁等が輩出、心学興隆の基礎を築いた。

その主張は著書『都鄙問答』、『齊家論』等に展開され、梅岩は自ら町人であり、『都鄙問答』は、「石門心学」の経典とされ、四巻の中で、「我教ユル所ハ商人ニ商人ノ道アルコトヲ教ユルナリ。全土農工ノコトヲ教ユルニアラズ」と述べ、商人の道とは、商人の正しいあり方であり、商家の経営理念である、と規定している。「町人の道」が社会貢献する点では、決して町人は武士に劣らない事、町人を市井の臣となし、社会的職分から武士に比しても、なんら遜色あるべきはずがない所以を説き、商人の利を、武士の禄になぞらえた。『齊家論』では、「士の道をいへば農工商に通ひ、農工商の道をいへば士に通ふ」とも言い、梅岩には道の普遍性に対する深い信念があり、その士農工商の別についての観念も当時考えられていた階級観念とは全く異なっていた。当時は、享保改革の渦中であり、このような主張の表明には、並々ならぬ決意を要したといえよう。「商人の道」を説いたのは、町人に人としての道の倫理的自覚を強調したといえる。梅岩は決して正規な学問を習得した儒者とはいえない。独学の思索者とよばれるに相応しい人であつた。町人生活の体験の深奥に、我流ながら鋭い検討を加えていった所にこそ、彼の面目があつた。「文字を正（し）ては、手紙一通も書得ざる者」とさえいう。一生独身で簡素な住居に自適の生活を送つたが、それは世捨て人の隠遁生活とは全く異なり、常に隣

人の上を思い、世を濟おうとする志にあふれていた。各地の心学講舎の活動は、本来的に殆ど全てが自主的に庶民の側から発生した善意と隣人愛に基づくものであった。

**2. 石門心学の源流：**既成の思想体系に対して、自らの体験から「神儒仏ともに悟るは一なり」という。主著『都鄙問答』に使われた引用書と回数は次の通りであり、梅岩の思想の源流が、いかに多岐にわたっているかを伺われる。

漢籍 38種 389回（経書、諸子、史書、雑） 経書『論語』133『孟子』116『大学』20『中庸』20『易経』14『書経』12等 18種 362回 諸子『老子』2『管子』2『荘子』1『顔氏家訓』1等 9種 11回 史書『史記』3『資治通鑑』3『三国史』1等 7種 14回 雑 『説文解字』3『居家必要』1等 仏典 31種 45回（『法華経』4『観無量寿経』3『華嚴経』2等 和書『日本紀』7『徒然草』4『和歌朗詠集』1『千載集』1等 9種、23回と 31種に至る使用回数では、『経書』が最多で、その内『論語』、『孟子』が多く、仏典も多種多岐にわたっているが、陽明学に属する書物は皆無であることにも注意される。

梅岩の学の特色は、自身が明らかにしようとした聖賢の道を経書の上で知るのではなく、自らの心の中で自証し、自由に採用し自らの言葉とした事である。

石門心学の思想の核心が儒教から出ていることは、疑いのないところである。「学問第一の所は、聖賢に至ることなり」と梅岩はいつている。「聖人の教へは、世の人、人ならざる故に、人にせんと思召」すもとなし、人倫の道を説く儒教を基礎にしたのである。『都鄙問答』においては、上記の通りである。『論語』は郷党篇を除く十九篇と『孟子』は全編と梅岩の思想の骨格を形成している事は、明らかである。孟子の性善説に傾倒した。「性善を知るは、聖賢に至る門なり。門戸無くは、如何ぞ、聖人の道に入るべき」という。体験を学問の根拠とした梅岩が、性善の論義も、孟子の諸説がわが心に合うが故に、孟子によるという。

しかし、梅岩は、宋儒の解釈をとりいれて、哲学的思考を、孔孟の原始儒教に加え、「予が学問修行は、論孟を基とす。其の意を得るために程朱の註による」と述べ、程朱の註をも用いた。次に、仏典にも造詣がふかく、高弟にも仏教の修行をつんだものが多かった。後の齊藤全門、中沢道二、手島堵庵は仏教色が強い。

神道については、23歳で京都の商家で再度の奉公をした頃、志したのが神道であった。当時京都を中心に、神道管領吉田家の吉田鞠負、垂加神道の伏見稻荷祠官・大山為起、庶民神道派の増穂残口等がいたが、梅岩の神道については、資料が残っていない。仏教では、黄檗禅の小栗了雲と出会い、黄檗禅を修めた。

江戸時代は、神道が儒教化すると共に、多くの儒者が神道を取入れようとし、いわば、神儒習合の時代であり、終生、信仰の中心に神道を持ち、「神道こそ、日本人の学問の本でなければならぬ」と信じた事は、当然の事にて、後継者に伝えられた。

梅岩は、既成の思想体系は、いずれも「我が心を<sup>みかく</sup>琢く<sup>とぎくさ</sup>磨種にすぎず、「物に由って法は替る」べく、「儒道仏道老子孟子に至るまで、尽く此の国の相とするやうに用」いなければならぬと主張し、三教の軽重を論じて、神道を中心におき、いずれにもこだわらなかつた事には、実質を重んじる商業社会の気風から由来した。自らの体験から「神儒仏ともに悟るは一

なり」というのは、梅岩の学問の特色は「ただ三教を合揉し、或いはこれを折衷するというのではなく、まず己が心を得た上で、自由に三教の要旨を己に用いるところに認められるべきである。梅岩の思想には、確かに何か明るい所が見えた。それは、受難期を迎えたとはいえ、勃興の頂点にたった町人社会の清新な気風と通じるものがあり、石門心学が「町人の哲学」としてもつ性格の一つであり、士農社会から出ない明るさが力と伴い、石門心学が広く深く世人の心を捉えた要因であろう。

**3. 梅岩の経済思想：**梅岩は、幕藩体制下に商家奉公をしながら、町人として、「人間のあり方」を深く考え、苦悩を重ねて町人が生きるべき道を求めた。『都鄙問答』、『齊家論』を通じて、五項目をあげることができる。

i. 正直・儉約・家業精励：士農工商に通じる一理をつきとめ、正直の徳とし、儉約の実践にありとし、天下公のための儉約であり、そのものの本質を生かす事であった。

・実践道徳の根本は、正直の一語につき、商業道徳の根本も「商人の正直」である。

・儉約は正直の心の現れであり、身を修め、家を整えるものであり、物の法に随う事である。

・儉約と家業精励とは「家」の経済の二大事項であり、「約ヲ守テ美麗ヲナサズ、家業ニ疏ラズ、財宝ハ入ヲ量テ出コトヲ知」と。

・儉約とは、その性質に適した消費が行われ、物の効用を十分に発揮せしめる事で、物を生かし、人を生かす事が、真の儉約であり、真の儉約は、正に「仁」と異なる事のないものである。

・「我が為ニ吝コトヲ為スハ欲心ニテ、儉約ト云コトハ天下ノ為メニナスコト」と、「天下公の儉約」といい、決して、商人のみに限るものではなかった。

ii. 知足安分：町人には町人をして町人たらしめるものがなければならないと考えた。

・全てをあるがままに自然と見、天命と見た。士農工商の職分は天命であり、天職を遂行する上においては、自らを卑下する何物も見出されず、四民の職分に尊卑なしと説く。

iii. 商人の利：「買利」は「欲心」にあらず、「売利を得る」事こそ、「商人の道」である。

・商人の利を武士の禄になぞらえた。

・農工商の所得は、何れも、社会的貢献に対する禄とみた。

iv. 同業共存：商取引は、一対一、万人対等の場で行わねばならない。取引の当事者双方が自由であるべきである。

・「商人ノ道ヲ学ブ人ハ、自然ニ此心ニ向ハズ、一門一家町内同ジ商売ガラノ衆ウ中、共心一同シテ商ヒヲ楽シムニ致ルベシ」とする。

v. 自他共に利益をもたらす：商取引は、全て公正に行なわるべきである。

・商取引は「自他共ニ万事ニ通用シテ心ヤスマル為ノ売買ニアラズヤ、是天下ノ心同キコトヲ知ルニアラズヤ」という。

梅岩は、商人道の大本を「天下ノ心ヲ安クシ、御法度ヲ守リ敬モ外ニ商ノ道アル事ヲ未ダ見ズ」という。

梅岩の学の特徴は、自身が明らかにしようとした聖賢の道を経書の上で知るのはな

く、自らの心の中で自証し、自由に採用し自らの言葉とした事である。

梅岩の思想は、神・儒・仏の三教一致説といわれ、彼の周辺の商人達に説かれ、著作に展開され、売利を天命とする商人観のように、商人層の社会的意義を強調する点であった。主著『都鄙問答』は弟子により祖述され、梅岩の根本精神は修正されていない。

**4. 主要な弟子達の経済思想：**梅岩が育てた多くの門人達の布教努力により、講舎は最盛期には、全国 34 藩、180 ヶ所余に及んだ。多くの後継者の中から次の 2 名の概要を記す。

① 手島堵庵（享保一五年（1718）～天明六年（1789）・69 歳）名は信。通称を近江屋源右衛門。代々京都・華頂山麓に住む。18 歳時に梅岩の薫陶を受け、死去迄 26 年間、宝暦二十年（1760）初めて出講釈を行い以降、彼は門弟中最年少者としてその遺産を継ぎ、最も多く尽力し、22 講舎、千人に及び、後代心学の全国的発展の基礎をなした。世に「手島学」「手島流」と呼ばれる。その教化活動は田沼時代と一致する。主著に『坐談随筆』『知心弁疑』『町人身体はしら立』等 20 種が弟子により『手島堵庵全集』に収録された。師が展開した思想を平易な文章、歌句にて心学の精髓を講説し、いわゆる「思案（のち、私案なし）」なしである。基本的な観念は 48 文字を頭によまれた『男女ねむりさまし』において、忠孝（「とにかくにも親孝行と主への忠義をわすれやんな）、物欲色欲への誡め（「かねをほしがるとそい（底意）がいやよ 人を見くだす天狗ずき）、知足安分、太平の世に生れた事をば喜ばば心安らかであるという。（「貧と福とは天命なれば、われがままにはどもならぬ）」

経済思想の要点は、師の思想を簡素化し、経済生活についても、その倫理化を主張した。

i. 売買渡世の反省：売買渡世は金銀を儲ける行為であり、経済生活は、物に関わる生活であるが、堵庵は金銀財宝のもつ意味を反省し、財宝は人の用をなすが故にこそ貴いのであくまで生活の手段である事を自覚し、その本末を誤ってはならないという。

ii. 「ありべかかりの正直」：堵庵は師の正直を「ありべかかり」と読ませ、ありべかかりは「無理」しない事であり、「家業に無理いはず無理せねば、売人も買人も皆能く得心する」「真の商人は、先も立、我も立つことを思ふなり」といい、商人も、本心を知る事により、大成すると確信した。営利行為の基礎に道義が確立せねばならぬと主張し、営利行為は正直によって裏付けられねばといい、その正直に「ありべかかり」との注釈を加える。

iii. 家業と心学：師と同様に儉約に努め、特に一家の主人に身をつめ、無益な事をなさず米一粒、糸一筋、紙一枚でもすたらぬように心がけ、拾い集めるだけの心得がなければならぬと誡める。「商人ならば商いをして、ただ我家業をよう勤むるを学問といひますワイ」遺稿に「商人一枚起請文」があるが、法然上人の「一枚起請文」に拠ったもので、彼の経済思想を端的に示している。堵庵の弟子脇坂義堂も、近江商人の中井源左衛門家の家法「金持商人一枚起請文」を同様に使った。

② 中沢道二（享保一〇年（1725）～享和三年（1803）78 歳）名は義道。京都西陣機業化の子。安永時に堵庵に入門。安永八年（1779）剃髪し、道二と改名、堵庵の命により江戸にて参前舎を開舎し、本拠として縦横に活躍、死去迄 25 年間、その軽妙にして迫力のある道話により九州を除く 5 畿 7 道 27 ヶ国にわたり、21 舎に、新たに武家社会にも受容され、約

10 藩、旗本等に及び、今日も『道二翁道話』6 篇 15 巻と知られる。同書にて、「道の哲学」を説き、「道とは何ぞ、心の事じゃ。道と心とは一つのものであり、すべては心に還元される。」という。経済思想の主点に、経済生活を誤る事により、人倫を踏みはずさないために、経済生活の道義的な基礎を考えた。

i. 私利私欲に駆立てられ、一生あたふたと暮らすのは誠に憐れむ人間であり、とりこになる事、全く「道」を知らぬ人であり、「道」を説いてひき入れるのが、心学の役目である。  
ii. 経済社会を「恩の世界」と観る。「一切の万物を天が本<sup>メ</sup>してござる」「天が、慈悲の根元」といい、この見地から、全てのものに菩薩の字をつけて、天の恵みを謝すべきと説く。  
iii. 全ての人々に、夫々天与の職分があり、その職分に励む事が、「天への御奉公」であり、御奉公により、「天の御恵み」をうける。職分は夫々の家業であり、その家業に勤める者に「天からの御給金」が下されるという。このような所説の背景には、梅岩が商人の利を天下御免の禄とみた思想を、道二は天職と天禄という考えであった。

iv. 知足安分は梅岩以来心学思想の伝統であり、道二は「人は一箇の小天地」といい「おれがおれといふ、人我の私といふものをなくするのじゃ。我といふ小さいから捨てよ、」世界が広くなり、足る事を知り、安心立命が得られると説く。

**5. 大坂における活動について:**大坂には、明誠舎（天明五年（1785）開設普及）を始め、いわゆる「大坂の七舎」（敦厚舎、静安舎、倚衡舎、恭寛舎、協恭舎、信成舎）が開設されたと同時代に懐徳堂（享保九年（1724）創設）、適塾（天保九年（1838）開設）が活発に町人の自負を持って学問所として隆盛、共存し、傑出者を生み、近世の大坂文化史上、町人文化に顕著な一端を担った。このように心学は京都や大阪と共に各地に普及したが、懐徳堂・適塾の学問とはその性格が違っていた。その後の文教的変遷について、現在の大阪大学における文科系諸学部の源流が懐徳堂、医学・理学的諸学部の源流が適塾である。

**6. 明治以降現在までの概要:**明治維新以後、明治五年小学校令の発布と共に、学校制度が発足し、大半は一斉に廃絶に帰した。大坂では講舎の明誠舎を流用して仮校舎・金田小学校と呼んだ。従来の心学関係者は明治一四年政府示達により神道に属すと認めら有隣舎を開校し再興、明治三八年文部省所管社団法人第 1 号指定の組織にて教化の継続となったが、教育勅語の精神の実現に向けられ、住友総理事・小倉正恒会長の下、普及に努力されたが昭和二〇年空襲のため消失、事実上一旦消滅した。戦後、昭和三八年社団法人（現：一般社団法人）心学明誠舎が大坂で設立され、現在、同会を含め 3 一般社団法人が、京都（一般社団法人心学修正会）、東京（一般社団法人石門心学会）で活動している。

## 7. 各々の見地からの意義

**1) 倫理思想史的意義：一和辻哲郎—**梅巖もまた三井高房（著作『町人孝見録』）と同じく、町人は利を以て職とするといふ規定の下に生きてみた。この規定は裏面に町人の賤しさを含意したものであるが、それに反撥する町人心は、利を以て職とするといふことに積極的な意義を見出ししていく。梅巖はさらに一步を進め、利潤追求を「天理」として是認する思想に到達したのである。そこに特に町人哲学としての特徴があると云ってよいであらう。

(中略) 梅巖は、儒教道德の普遍人間的な側面を強調し、それによって儒教道德を町人の方へ奪取しようとしてゐるかに見える。しかも彼はこの仕事を、町人は利を以て職とするといふ士道側からの町人規定に沿って、遂行してゐるのである。この問題については、『都都問答』卷二「或學者商人の學問を識の段」に、極めて明快な議論がある。道は一つである。商人の道も士の道に異なるところはない。こゝに梅巖が儒教道德を町人の方へ引き寄せようとする態度は露骨に現れてゐると云つてよい。特に農工商三民を士と同格に置かうとするものほかならない。即ち梅巖は、少くとも道義の點において、身分の利を否認してゐるのである。しかし梅巖は武士の支配のたゞ中に住んでゐたのであるから、武士側の標榜する貴賤上下の別に敢て逆らはずとはしていない。恥づべきはたゞ人の道にはづれることのほかにない。さうしてその人の道には士農工商の別はないのである。(中略) こゝにわれわれは、士と町人の差別を超えた人の道を説く梅巖が、町人の徳と見られ易い儉約と正直とを道の原理にまで高めてゐることに注意いなくてはならない。しかしその學派が心學と呼ばれる所以は、特に出發點として「心を知る」ことを重要視し、日常の生きた心理を把握することに努めたのは、彼の著しい特色であるとともに、やがて彼の流派の特色ともなつた。彼においては心は、物と對立した別の領域なのではない。心は物の主體的な側面であり、物は心の客體的な側面である。心學の運動を盛大ならしめ、またこの運動を心學と自稱うい始めたのは、梅巖ではなくして手島堵庵である。(『日本倫理思想史』下卷「町人道德と町人哲学」)

**2) 經濟・經營思想史的意義—竹中靖—** 石門心學は、町人のために、町人の手によつて、町人の道を説いた実践哲學であつた。(中略) 寛文から元禄のころは、商人勢力の主導権が、初期の由緒ある豪商たちから、問屋や両替屋が代表する「本商人」の手へ移りつゝあつた時期である。石田梅岩の思想は、このような「本商人」の意識の自覚形態である。將軍吉宗は農業の振興を第一とした享保改革の過程を通じて、町人は抑圧政策にあい、受難期を迎えることとなつた。このような風潮にたいして、勇敢に反駁し、町人存立の意義を高調したところに、石田梅岩の偉大さがあつた。石門心學は、だから、勃興の頂点にたつた町人が、深刻な受難期の試練をうけつゝ、町人道を基礎づけようとする精神的自覚の所産である。それは、たゆまない、しかも地味な本商人の經濟倫理の自覚形態である。經濟思想史上、石門心學が高く評価せられているのは、始祖梅岩が町人存立の社会的意義を強調したことにある。梅岩は正直を道義の根本とし、とくに商業社会成立の基本とかがえたが、正直の徳を儉約とむすんで、「儉約の哲學」を説くところに、かれの思想の特色があつた。經營理念という角度から、梅岩の「儉約」には、まず經濟的合理主義という意味をもつ、とかがえられる。『齊家論』は没年に出版されたもので、彼の思想のいたりえた最後の境地をしめしているが、正確には『儉約齊家論』と書かれ、儉約をもつとも重要な意味をもつことを教えたのである。店と奥との分離がほとんどなく、生活費の儉約、つつましい生活が、經濟的合理主義を意味するが、必要經費までも節約することでない。商人の理想像をえがいて、儉約と吝嗇を區別する。世の中のためでなければならぬ。延享元年(1744)梅岩は急去した。特に商家で高弟三

家（斎藤家、杉浦家、由良家）は夫々家法を制定、梅岩の精神を遺教として天下に弘め、商人の道の自己意識を確立、経営理念を具体化させる。（『石門心学の経済思想増補版』）

**4) 近代化論—Robert N. Bellah—** 「はしがき」において、梅岩は、商人も武士も同じように社会に貢献していると主張し、商人の尊厳に関心をもった人物であると、指摘した。梅岩が富を獲得する手段として道を説いた、とは書かなかった。彼自身の生活—他者に対し献身的に奉仕する例—は、質素なものであって、ほとんどどんな世俗的な財物も蓄積しなかったし、また彼は、現代日本の先駆者であるとともに、審判者でもある、と書いている。本文では、心学は、宗教として、悟りと無私の献身を教えたが、これらは、心学に近づく手段であり、かつその結果であった。心学は、政治的に合理化をつよめ、家臣の忠誠と無私の重要なことを強調して、権力の拡大を強めた。心学が天皇を強調したことは、幕府と密接なむすびつきにもかかわらず、明治維新に対する民衆の心を準備した点で重要である。心学は、商人階級の運動ではあっても、商人に直接的な政治権力を求めさせず、武士を政治的指導者として受け入れ、商人に経済分野の武士的役割に似た役割をさせようとした。それは、経済的には勤勉と儉約を強化し、生産を評価し、消費を小さくみた。さらにそれは、正直の普遍主義的な水準と契約の尊重を主張し、これらを宗教的に強めた。このようにして、それは、都市階級の間において、世俗の仕事に対し規律をもち、実践的、持続的な態度の成長に寄与すると考えられたに違いなく、経済が産業化の過程に入るにあたって、企業家と労働者の両方にとって重要であった。このさい、心学は、極東において最も古く、最も強力な宗教伝統の一つを、孟子にさかのぼって利用した。この伝統を、その時代の都市階級の欲求に適合させることによって、心学は、苦しみ悩んでいた商人の生活に意味をもたらし、さらに彼らのエネルギーを、社会に対して最も深い意味を得るような方向にむけたのである。

（『徳川時代の宗教』第6章心学とその創始者、石田梅岩 31頁 331～332頁）

**7・現代的意義:**梅岩が心学を提唱して280年余経過する。梅岩は経済活動を、人の幸せを優先として考えたと言えよう。戦後の社会情勢変化により人間としての道徳は敬遠され、経済成長により、金銭・物資に価値をおき、心・人としてのやさしさの育成を疎遠にした。梅岩の思想は、現在迄のこのような経済価値と共に、我々の生き方をよく見直すことに、より意義があろう。経済の問題を、人間の心の側から考える発想は、近代経済学の論理で進んできた戦後の経済を考え直すためにも、また戦後の私たちの生き方を考え直すためにも、梅岩の思想が自らを見直すうえで意義あるものと思われよう。物資中心、利己本位、人間の心の大切さや道徳観、社会的責任感を見直す活動こそCSRであろう。『都鄙問答』に見るCSRに通じるものに①徹底して売り先を大切にすること、②生まれながら正直であること、③商家は主人の持ち物ではなく、次代に伝えていくべき社会的公器と認識していたこと等が記される。

## 8. 住友の明治以降の支援概要

住友が石門心学に関心を示したのは明治以降であり、それは六代目総理事小倉正恆による。小倉正恆は国民道徳の昂揚に努めており、日本の道徳団体は同氏が援助した報徳社・竜門社・日本弘道会も石門心学もその教えは窮極において「まこと」の実践にありと

考えており、昭和27年追放解除後に社団法人石門心学会会長となった。しかし早期からあり、小倉正恆の義弟白石正邦は学習院教授等を勤め、『石門心学研究』、『手島堵庵心学集』等の著書があり、石門心学の先達・権威であり、正恆の正邦よりの影響は、当然といえよう。

大阪では、天明五年（1785）設立の心学明誠舎のみが明治維新後も残り、明治三五年社団法人として、活動を継続、戦後、小倉正恆は同舎の再建を当時の住友本社常務理事田中良雄に昭和二六年、石門心学会理事長石川謙への尽力を依頼した。柴田實・竹中靖一両教授よりの助言・協議の末、再建心学明誠舎の理事長に就任、同氏の貢献は大であり、正恆の遺言を継いだものといつてよい。

住友銀行が譲り受けた旧住友本邸跡に昭和三四年に禅の道場が建設されたのを機会に田中良雄の斡旋で、同所を心学明誠舎の会所にあてる事でき、小倉正恆、田中良雄の尽力、ひいては住友の寄与は大である。機関紙「みち」において、しばしば道徳主義を表明、住友の伝統的精神が汲み取られた。懐徳堂と共に心学明誠舎再建への努力は顕著といえる。

### 参考文献

- |               |  |      |                                       |
|---------------|--|------|---------------------------------------|
| 石田梅岩著         | 『都鄙問答』   | 1965 | 岩波書店                                  |
| 柴田 實著         | 『石田梅岩（人物叢書94）』   | 1962 | 吉川弘文館                                 |
| 柴田 實著         | 『梅岩とその源流』  | 1977 | ミネルヴァ書房                               |
| 柴田 實著         | 『石門心学（日本思想大系42）』   | 1971 | 岩波書店                                  |
| 島田あき子著        | 『日本人の職業倫理』   | 1992 | 有斐閣                                   |
| 柴田 實編         | 『石田梅岩全集』改訂再版上・下  | 1972 | 清文堂出版                                 |
| 芹川 博通著        | 『いまなぜ東洋の経済倫理か』   | 2007 | 北樹出版                                  |
| 竹中 靖一著        | 『石門心学の経済思想増補版』   | 1972 | ミネルヴァ書房                               |
| 手島堵庵著         | 『手島堵庵心学集』  | 1960 | 岩波書店                                  |
| 土屋 喬雄著        | 『日本経営理念史』  | 1964 | 日本経済新聞社                               |
| 中沢道二著         | 『道二翁道話』  | 1965 | 岩波書店                                  |
|               | 『道二翁道話続編』  | 1970 | 岩波書店                                  |
| 平田 雅彦著        | 『企業倫理とは何か—石田梅岩に学ぶCSRの精神—』                                    | 2005 | PHP研究所                                |
| 宮本 又次編        | 『上方の研究』第5巻   | 1977 | 清文堂出版                                 |
| 和辻哲郎著         | 『日本倫理思想史』上・下   | 1969 | 岩波書店                                  |
| Bellah R.N. 著 | <i>TOKUGAWA RELIGION: The Cultural Roots of Modern Japan</i> | 1985 | Free Press（邦訳 池田昭 『徳川時代の宗教』1996 岩波書店） |